

「中学校における生徒会活動について ～ボランティア活動を中心に～」

笹子 隆雄（足立区立西新井中学校）

I 始めに

ボランティア活動は、個人の自由意志を基本とし、自分の技能や時間等を提供し、他人や社会に貢献する活動である。それは、他人を思いやる心、互いを認め合いともに生きていく態度、自他の生命や人権を尊重する精神などに支えられている。

学校は、学習指導要領に則り教育内容が決められ、教育活動が展開される場所である。学習指導要領の中に「ボランティア活動」の文言が初めて登場するのは、1998年改訂の学習指導要領からである。道徳、特別活動（第4章・第2・A学級活動、B生徒会活動、C学校行事）、総合的な学習の時間といった領域の中にボランティア活動が位置づけられた。学習指導要領は法的拘束力を有するものであり、そこにボランティア活動の記述がされたことは注目すべきことであった。

教育改革国民会議が2000年に最終報告「教育を変える17の提案」を提出して以来、ボランティア活動を取り巻く状況は大きく動いた。今までの教育は要求することに主力を置いたものであった。しかしこれからは、「与えられ、与えることの双方が、個人と社会の中で温かい潮流をつくることが望まれる」と提言された。人間性豊かな日本人を育成するために「奉仕活動を全員が行うようにする」との提案を受け、文部科学省は「21世紀教育新生プラン」を策定し、「多様な奉仕・体験活動で心豊かな日本人を育む」ことが挙げた。奉仕活動・体験活動の充実及びそのための学校教育法、社会教育法の改正などを施策として掲げ、学校教育法、社会教育法が一部改正され、学校と教育委員会は、ボランティア活動等社会奉仕体験活動の充実・奨励に努めることとなった。2008年3月には学校教育施行規則を改正するとともに新幼稚園教育要領、新小学校学習指導要領及び新中学校学習指導要領が公示されるに至った。

教育活動全体をとおしたボランティア活動の充実をすすめるために「学校行事等の特別活動、総合的な学習の時間をはじめ教科等の学習指導、及び部活動等の課外活動など教育活動において適切な位置付けを行うこと」が求められている。

青年の意識の変化を時系列でとらえることを目的とする、世界青年意識調査がある。ボランティアについての質問紙調査の結果を経年比較すると以下のとおりの推移を見ることができる。なお我が国での調査は、18歳から24歳までを調査対象者としている。

1998年調査報告書

「現在、活動している」	・・・2.7パーセント
「以前、したことがある」	・・・22.2パーセント
「まったくしたことがない」	・・・74.7パーセント

2003年調査報告書

「現在、活動している」	・・・3.3パーセント
-------------	-------------

「以前、したことがある」・・・31.7 パーセント

「まったくしたことがない」・・・63.2 パーセント

2008 年調査報告書

「現在、活動している」・・・5.6 パーセント

「以前、したことがある」・・・43.9 パーセント

「まったくしたことがない」・・・50.4 パーセント

ボランティア活動に取り組んでいる割合は、劇的に増加しているとはいえないが、着実に参加率は上昇している傾向が認められる。「現在、活動している」の国別比較で回答割合は、アメリカ…17.6%で最も高く、韓国…8.2%、イギリス…7.0%、フランス…6.3%、日本…5.6%の順となっている。ボランティア活動は、人間としての幅を広げ、大人となる基礎を培う意味で教育的意義が大きい。しかしながら、現状では、必ずしも十分に行われているとはいえない。2011 年の大震災を経て、我が国の青年の意識には、明らかな変化をみることができる。実態として把握するためにも、次回の質問紙調査による結果を待ちたいところである。

II 本校におけるボランティア活動のはじまり

1975 年開校の本校は、当時は区内でも上位の学力、都・全国レベルの部活動等、活発な研究活動等、区内でも有数の上位校として見られていた。しかし状況は一転し生活指導困難校となり、厳しい冬の期間を送ることになった。そんな学校の状態を見る地域の目は厳しかった。現在、学校経営方針「夢と規律と向上心」の実現に向け、生徒の活躍を重視する教育活動へ、事後より事前の生活指導へ、信頼される学校づくりへと教職員一丸となり学校改善にあたってきた。その結果、学校の様子も落ち着き、地域や保護者の信頼も回復しつつある。

その間の取組の一つに、生徒会を通したボランティア活動がある。意識の上では、ボランティア活動に参加したいという回答は高い割合で肯定的評価が得られる。本校の生徒総会でも、判で押したように「ボランティア活動の参加」を呼びかける発言が多かった。

はじめは、学校のすぐ前にあるの「住区センター」で行われている「住区まつり」であった。同センター所長から、ボランティアスタッフとして生徒の参加はできないかとの話があり、早速生徒に呼びかけたところ、10 名の生徒が参加の申し出をしてくれた。

その様子は、学校だよりに写真付きで掲載し、校内写真ギャラリーには大判写真で紹介、さらに学校紹介ビデオに収録し放映するなど、広報にあたってきた。廊下に大判写真を掲示している「ギャラリー」に、眺めている生徒の姿が増えてきた。

その後、近隣小学校の「フェスタ」、駅前商店街主催の「よさこいフェスタ」への参加、防災ボランティア「避難所運営訓練」(2 カ所)、社会を明るくする運動主催の「パレード」への参加(吹奏楽部)、「フラワーボランティア活動」年 6 回、生徒・保護者・おやじの会・町会・教師で参加する「校内美化ボランティア」、「標語大会」の優秀作品を校舎周りに看板で設置、「連合子ども会運動会」のボランティアスタッフ等々を次々に紹介し、参加

を募り、参加生徒数は増えてきた。部活動顧問の協力で、部で参加をするなどもあった。

毎回の活動は、その都度、ホームページにも掲載し、学校内外に伝えるようにしてきた。

Ⅲ ボランティア活動の広がり

初年度の参加生徒の「参加して良かった」という感想が口コミで広がりを見せた。これまで、生徒への参加の呼びかけで、強制するようなことはなかった。主催者から参加の要請や案内があるたびに、学校からの呼びかけという形で行ってきた。回を経るごとに、主催者側が希望する人数の2倍から3倍の生徒が申し出るようになってきた。2年目からは、募集呼びかけの印刷物は、全て生徒会が生徒会長名で配付することにした。生徒会長は、月に1回開かれる「生徒会朝礼」で、会長自らが直接呼びかけることとした。新たな活動も増えてきた。よさこいフェスタでは、踊り子参加以外にも会場警備等のボランティアスタッフや、青少年委員会主催「親と子のふれあい音楽祭」では演奏参加以外に裏方として舞台周りや小学生のお世話にもあたってきた。

また、単独ではなく複数校が集まるような活動にも参加するようになった。運営にあたっては、生徒会が中心となりあたるなど、内容や範囲においても新しい段階になってきた。その結果、区やボランティアセンター、保護司会、地区対策委員会等の公的機関からの表彰もいただくようになり、生徒会役員としても大きな張り合いのある活動となってきた。

校内活動としては、生徒会保健委員会がペットボトルのキャップを集める「エコキャップ」運動もはじめた。発展途上国における衛生状況の学習にもつながった。本校生徒はもとより、保護者・地域住民からもキャップが届けられるようになり、始めて3年目にあたる現在、24万個を超え、800個でワクチン1本の換算によると、300本のワクチンを送ることができたことになる。

ボランティア活動とは離れるが、小学校保護者向けの「学校説明会」では、校長、教務主幹等の話の前に、学校紹介ビデオ（生徒会役員編集）を使い、生徒会役員のナレーションによる学校紹介を行っている。生徒や生徒会の活動の場を広げてきたが、新入生の保護者には大変好評である。また、役員がビデオとプロジェクターを持って、近隣の小学校に出向き、「出前学校紹介」も行ってい、本校の紹介というより、中学校生活の紹介によりスムーズな学校連結を目指している。

Ⅳ 防災ボランティア活動

本校のボランティア活動の中で「避難所運営訓練」と「中学生消火隊活動」の防災ボランティア活動は、地域連携の視点で特徴のある活動となっている。

避難所運営訓練

地元町会が主催する防災訓練である「避難所運営訓練」が毎年本校を会場に実施している。その訓練に、本校生徒もボランティアとして運営スタッフとして参加している。

生徒会の呼びかけに応え 50 名程度の中学生在が、炊き出しを行う物資部、心と体のケア訓練を担当する救護衛生部、展示ブースの説明担当の施設管理部、救命救急を担当する応急救護部、訓練消火器の担当をする防災部にわかれ活動をする。特に今年は、実際の発災時を想定した訓練形態とし、途中ではトラック協会による資材搬入を設けるなど実際に想定した訓練と行った。

少年消火隊活動

本校では、中学生による消火隊を編成している。学校に配置されている、エンジンポンプとしては最小サイズの「D級ポンプ」を使い、放水訓練を行っている。生涯防災教育の一環として位置づけている。

年に一度行われる総合防災訓練は、警視庁や陸上自衛隊、東京消防庁も加わった総合防災訓練が行われるが、本校の消火隊も参加し、放水訓練を披露する。

V 本校ボランティア活動の原則

本校においても生徒会活動は、学校内で行われる生徒会としての活動の他に、地域のボランティア活動への参加、地域の方々との交流など、生徒の学校生活を充実させていくような学校外の活動も、その活動内容として位置づけている。委員会活動など学校内の活動も大きな意味を持つ活動であるが、生徒の発達段階を踏まえ、生徒の関心は広く学校外の事象にも意識を持たせることは望ましいことである。ボランティア活動となると、地域の方々との幅広い交流など社会貢献や社会参加に係る活動となり、生徒が社会の一員であるという自覚や役割意識を深めることができる。

○ 教員引率を原則

完全な自主意識でないかもしれないが、ボランティア「体験活動」として捉えている。体験を価値あるものにするには、指導教員の同行があると良い。生徒の活躍を教員は見ることができ、生徒も見られる場とすることができる。生徒にとって「体験」という引き出しがあれば、今後活動に携わる機会があれば、進んで参加することができる。教育的ねらいを吟味し、教職員の共通理解とともに、保護者の理解を求めることも必要である。

○ 失敗体験よりも「良かった」体験・「充実」体験の原則

失敗から多くのことを学ぶことは承知しているが、まずは参加して良かったと思える体験をさせることに視点を置いている。生徒にとってははじめての経験であり、不安を抱えての参加となることが少なくない。その後の継続した活動にしていくためにも貴重な契機となる。周到的準備や、事前の生徒指導を大切にしている。当日の服装や挨拶、集合時刻等、遺漏のないよう配慮する必要がある。また、活動に当たっては、目標を設けることも、生徒の自覚をもたせるうえで効果がある。

目標(例) 「素早い行動、気配りで、喜ばれる仕事をしよう。」

○ 希望者は全員参加の原則

近年、参加生徒が増え、主催者側の受入数を超えてしまうことが少なくない。生徒は自分から進んで参加申込をしている。できるなら申し出た生徒は全員参加をさせていきたい。そのために、前半チームと後半チームに分け参加させる、学校で臨時の活動をさせる、などの工夫をしている。定員限定で募集することもあるが、そのような際には、仕事を多くしていただくよう依頼することもある。

VI 大人の側のボランティア活動

学校は、学校だけの指導で完結できるものではない。保護者や地域の方々とともに知恵や協力を出し合い、成り立っている。本校でも、多くの「大人」の方々の理解、支援、連携をいただいている。

○ 校内美化活動

校内の美化活動として、年に1回校内のペンキ塗りボランティアを行っている。校内や外周の塀など広域な範囲の塗装を行う。主催は学校運営協議会である。生徒には協議会長と生徒会長が連名で呼びかけをし、参加者は、生徒、保護者、おやじの会、町会役員、教職員が参加する大規模な美化活動となる。活動を行う以前は、保護者や地域の方々の学校を見る目は、外から学校を見ていたようだ。しかしこの活動をとおり、学校の中の人(学校関係者)であるとの意識を持てただけであったようである。学校関係者の学校に対する評価が大きく変化してきた。

○ 学校図書館ボランティア

毎週1日、午前中を使い学校図書館の整備にあたっている。昼には校長、副校長、学校図書館支援員と給食を共にし、ランチミーティングを行い、意見調整をしている。図書の整理、管理、飾り付け、貸出業務等の後方支援以外に、「ブッカー講習会」等生徒会図書委員会に向けた活動、読書文芸部を教員である顧問とともに部活動指導にあたっている。

○ 朝のあいさつ運動

P T Aが一人年に一回の当番で、毎朝校門で朝のあいさつ運動を実施している。校門では、週番の教員と週番の生徒が立番をしているが、一緒にならび登校してくる生徒にあいさつの声かけを行っている。スタートは10数年前の困難期であると聞くが、生徒の様子を見ながら、我が子に限らず声を掛ける機会となっている。

VII ボランティア活動の課題と今後

○ 生徒会の機能強化

区内各校の生徒会役員による交流会では、各校の活動報告が行われ、他校の活動を参考にすることができる。他校の取り組みを参考にしながら、より生徒会の機能強化を図ることで、生徒の自主性を高めることが可能となる。ボランティア参加要請の窓口を生徒会とするなど、今後の課題とする。

○ 小中連携

中一ギャップといわれる問題には、小中連携が欠かせない。教員レベルの協議会・研究会を進めるとともに、生徒会レベルでの小中連携を進めることの可能性を探る。小学校との調整が必要となるが、小学校の補充等に出向き、「赤ペン先生」などの活動も考えることができる。

○ 部活動で参加できない生徒

部活動によっては、土曜も日曜も練習で参加したくても出来ない生徒が少なくない。引退後の3年生の参加を求めることはできるが、部活動単位で参加をしていく形態も考えられる。

○ 卒業後も生きる活動

少年消防隊経験者が、卒業後に地域の消防団員として活躍することはぜひ期待したい。また、よさこいフェスタでおどり子ボランティアに参加した生徒が、地域の「おどり子連」に参加している。その他、何らかのかたちで、ボランティア活動、奉仕活動を続け、社会参加をしていくことで、地域貢献や社会貢献につながってくれるものとする。

ボランティアを志向する社会は、個人が共同体社会への共感に基づいて、自主的にその営みに参加し貢献することに価値を置く社会といえる。こうした方向を促進することは、社会をより望ましいものへと変革していくことにつながるものである。

ボランティア活動は、生涯学習の成果を生かし、深めるのに相応しい場の一つであり、学習成果を活用するために、ボランティア活動を推進していくための方策を検討することが重要な課題である。

学校は、ボランティアを志向する社会をさらに進めていくためにも、人々のあらゆる場における学習活動を振興することが必要であり、学習によって得た知識や技術などの成果を積極的にボランティア活動に生かすことができるようなシステムの構築も必要となる。学校におけるボランティア活動の推進は、今後ますます重要な課題となってくる。